



千葉大学医学部同窓会報 第112号

題字 故 鈴木五郎 (大11卒 元るの は な 同窓会長)

編集発行者
千葉大学医学部
るの は な 同窓会報編集部
〒260 千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学医学部内
るの は な 同窓会
電話 (043) 222-7171 内線5026

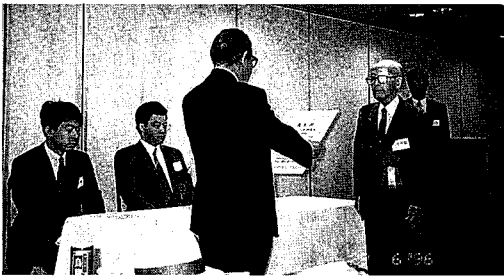
平成8年度

るの は な 同窓会総会開催

平成8年度るの は な 同窓会総会は、大学のるの は な 同窓会の主催により、平成8年6月29日(土)午後3時より、千葉駅ビルのペリエにおいて開催された。出席は井出会長ほか45名であった。

山浦理事の司会により会議に先立って、物故者48名の冥福を祈り、黙祷をささげた。井出会長挨拶、高橋医学部長挨拶に続いて、木内理事より事業報告があった。また議題については各担当理事から説明があり、審議承認された(詳細は第10面に掲載)。

今回はるの は な 同窓会賞初の受賞者が決まり、総会に引き続き授賞式が行われた。



た(写真、平形義人氏撮影)。

第一回の同窓会賞は川村

医学部長就任のご挨拶

高次機能制御研究センター免疫機能分野
谷口 克 (昭42卒)



このたび医学部長を拝命いたすことになり、ご挨拶申し上げます。

二十一世紀を迎えようとしていいるいま、社会構造は大きく変換しようとしています。これまで絶対的制度であった終身雇用制は崩れ、日本の花形産業であった半導体を軸とするコンピュータ産業、自動車などの製造業は翳りが見え始めているため、新しい未来産業の誕生を待ち望んでいます。しかし、新しい産業を起す芽となるべきベンチャー企業の育成は、制度疲労のため、大幅に遅れているのが現状です。

明義(恙虫病の研究)、幡野雅彦(器官形成とリンパ腫瘍化におけるH O X 11遺伝子ファミリーの機能解析)、武城英明(LDL受容体遺伝子ファミリーの動脈硬化

および脳代謝における生物学的意義の解明)の3氏であった(第6面に関連記事あり)。表彰状および副賞の授与が行われたのち、井出会長の祝辞と受賞者の挨拶があった。

も言われています。

大学はこのような社会構造の転換期に日本の将来の羅針盤として、国民に対して指導的役割を果たす使命があります。

この意味で我が医学部は二十一世紀の医学・医療・生命科学研究にどのような個性とアイデンティティをもって国民に範たるべきか、どのように責任を果たすのか真に問われています。

教授就任の挨拶

泌尿器科学講座
伊藤 晴夫 (昭39卒)



平成8年7月1日付けで島崎淳教授の後任として、泌尿器科学講座を担当させていただきますことになりました。

泌尿器科は初代の百瀬剛一教授が教室の基礎を築かれた。お一人の教授によって築き上げられてきた伝統

遷があった。続く懇親会には35名の出席があり、同窓会活性化について色々有益な意見が交わされた。

二十一世紀に向けた医学教育改革、先進医療体制の確立、大学院の重点化など我が医学部の将来計画を作ることが当面の課題となります。

歴史と伝統を誇る千葉大学医学部がより一層発展するために、広い視野に立つて、新しい英知を結集することが必要です。同窓会の皆様方のご指導、ご支援を心からお願い申し上げます。

ある教室をさらに発展させるよう努力したいと思っております。

私は昭和39年に卒業し、一年間のインターンの後、泌尿器科に入局し、同時に生理系大学院に入学しました。大学院のうち二年間は泌尿器科の臨床研修を行い、あとの二年間は三浦義彰教授の主宰された生化学教室でプロスタグランジンの研究を行いました。泌尿器科教室に戻ってから尿路結石の研究を始め、昭和50年から二年間、シカゴ大学腎臓科のO教授の下に留学しま

O-157 情報

本学微生物学第二・野田公俊教授は、一九八四年にO-157毒素が赤痢菌の志賀毒素と同じものであることを報告している。

今回は、感染者への偏見やいじめをなくそうと、「正しい知識でO-157いじめに対処」と題したマニアルも作成している。そこで、野田公俊教授のO-157に関する最近の論文とマニアル入手法をお知らせします。

◎千葉医学雑誌72巻247頁250、1996

◎問い合わせはFAXで、千葉大学医学部野田公俊研究室(043-1226-2049)、もしくは最寄りの保健所・保健センターまで。

した。帰国後は男性不妊・内分分泌および尿路結石の指導とともに、前立腺癌のアンドロゲンレセプターについてなど泌尿器科に関する研究にも参加しました。十年前に帝京大学市原病院が開設され、泌尿器科の教授として赴任いたしました。初めのうちはもっぱら臨床のみに専念し、この間は新しい手術の導入、手術手技の改良、予後調査など

(次頁へ)

の臨床的研究を主にしてい
ました。研究設備も一応整っ
た数年前より尿路結石の研究
を再び開始することが出
来ました。幸いにして、今
までの概念を覆す再発防
止のための新しい食事療法
の開発、ならびにヒト腸内
のシユウ酸分解菌の発見な
どの成果をあげることが出
来ました。

今後は臨床および研究の
調和をはかりつつ、現在の
四つの研究の柱を進展させ、
日本をリードする教室にし
て行きたいと思っています。具
体的には有能な臨床医を育
て関連病院の充実をはかる
とともに、教育者を育成し
て他大学へ教授を派遣する
ことであります。この目的
に向かって教室員ともども
邁進して行きたいと思いま
すので、これまで以上のご
指導・鞭撻のほどお願い申
し上げます。

解剖学第二講座 湯浅 茂樹 (岡山大昭50卒)



平成8年7月1日付けで
永野俊雄教授の後任として
解剖学第二講座を担当させ
ていただくことになりました。

電子顕微鏡を駆使した
生殖細胞の形態学で輝かし
い業績を挙げられた永野教
授の教室を引き継がせてい
ただけです。大変光栄
に思っております。

私は岡山大学医学部を昭
和50年に卒業後、岡山大学
大学院医学研究科で生化学
を専攻しアミノ酸代謝の研
究を行いました。大学院卒

業後、フンボルト財団リサー
チフェローとして西ドイツの
ビュルツブルグ大学、チュー
ビンゲン大学で神経化学を
学びました。当時、神経系
の発生メカニズムの研究が形
態学と生化学、分子生物学
の境界領域で発展しつつあり、
私もこの分野に強い関心を
持つようになりました。

私はこの領域の研究をす
めるためには形態学を習
得することが重要であると
強く感じ、帰国後、当時、
岡山大学医学部第三解剖学
教室で神経系の発生と再生
に関する斬新な研究を展開
しておられた川村光毅教授
(千葉大学医学部昭和36年
卒、現慶應義塾大学医学部
解剖学教授)の指導の下で

研究を開始しました。川村
教授の慶應義塾大学への転
任に伴って、助手、講師
として肉眼系統解剖、神経
解剖、組織学の教育に従事
するとともに、小脳を中心
とした神経系の発生、神経
移植、神経再生の研究を行
って参りました。

平成6年に岡崎国立共同
研究機構生理学研究所へ助
教授として移ってからは、
形態学的研究の基盤の上に
分子生物学の手法を導入し
て神経系の形態形成機構の
研究を続けております。

これからは永野教授の築
かれた電子顕微鏡形態学の
基盤を活かしつつ、遺伝子
工学、発生細胞工学の手法
を積極的にとりいれて、中
枢神経発生を含めて広い視
野から形態形成機構の研究
を進めてゆきたいと考えて
おります。基礎ならびに臨
床の領域の方々と、各々の
特徴を活かした共同研究に
積極的に取り組んでゆきた
いと考えておりますので、
今後、関連領域の方々のご
支援をお願い致します。

一方、医学教育において
解剖学は人体の構造に関す
る知識を習得するという点
で最も基礎的な科目であり
ます。肉眼解剖学、組織学
いづれにおいても、自らの
手を動かし、自らの目で観

察し記録するという地道な
形態学の修練は、医学の知
識を習得する上での原点で
あって、その重要性は、機
器を用いた画像解析手段あ
るいは分子細胞レベルでの
医学が進歩してもいささか
も減ずるものではありません。

寄生虫学講座 矢野 明彦 (昭47卒)



平成8年8月1日付けで
本学寄生虫学講座を担当さ
せていただくことになりま
した。寄生虫学講座は昭和
31年、故横川宗雄教授によ
って開設されました。横川教
授は吸虫症を始めとした研
究を進め、日本の寄生虫学
のみならず世界の寄生虫学
をリードするセンターとし
て寄生虫学講座を確立しま
した。ついで、吸虫症学に
免疫学を導入した小島莊明
前教授(現東大医学部研究

が現在、益々重要性を帯び
てきております。オースドッ
クスな形態学的知識の習得
こそ、機能との結びつきを
自らの頭の中で統合するた
めの最善の過程と考えて解
剖学教育を行いたいと考え
ております。

伝統ある千葉大学医学部
の発展のために、以上の点
を念頭において全力を尽く
す所存であります。皆様の
ご指導、ご鞭撻を何卒よろ
しくお願い申し上げます。

所教授)がその伝統を引き
継がれました。本講座は、
大島智夫前横浜市立大学寄
生虫学教授、吉村裕之前金
沢大学寄生虫学教授、一九
九八年日本で開催される第
九回国際寄生虫学会長の辻
守康杏林大学教授(前広島
大学教授)始め、鈴木守群
馬大学教授、佐野基人前浜
松医大教授、など多くの著
名な研究者・教育者を輩出
しました。この様な伝統あ
る講座を担当するにあたり
その重責に身の引き締まる
思いであります。

私は昭和47年に本学卒業
後、産科婦人科へ入局、二
年間の研修後、第二病棟に
おられた多田富雄東京理科

大学生命科学研究所長(前
東京大学教授)、そして米
国マサチューセッツ工科大
学(MIT)のM.D.博士の下
で免疫学を学び、昭和55年
に、当時小島教授が主任を
務められていた信州大学寄
生虫学講座に就職し、平成
2年に長崎大学医学部医動
物学教室へ赴任しました。

寄生虫あるいは寄生現象
は、地球上の生物が織り成
す生物間ネットワークの中
でも、地球環境の中で許さ
れ得る最大限の多様性を築
き上げてきた象徴的存在と
も考えられます。日本を始
め先進諸国からは多くの寄
生虫症が撲滅されました。
今それと並行して、少なく
ない数の生物の絶滅が危惧
されております。ある意味
では、寄生虫・寄生虫症の
存在は地球環境のバロメー
ターとも考えられます。科
学・科学技術の発展は今後
の人類にとって必須不可欠

なものである一方で価値観
の一元化傾向を強めていま
す。現代科学・科学技術の
今後の発展の方向にさまざま
な意味でのバランス感覚
が必要なことを寄生虫は示
唆しているようにも思えます。
医学部における医学教育や
医学研究の在り方が現在問
われていますが、寄生虫学
もこの教育改革の流れの中
で大きな転換点に立たされ
ています。基礎医学の研究
成果は医学教育や臨床医学
へフィードバックされなく
てはなりません。基礎系教
室や部局、臨床系教室との
ネットワークを組みながら、
諸問題解決へ向けて歩みを
進めて行きたいと思ってお
ります。そして同窓会の益々
の発展に、微力ではありま
すが尽力する所存でござい
ます。今後とも宜しくご指
導、ご鞭撻の程お願い申し
上げる次第です。

放射線医学講座 伊東 久夫 (慶応大昭45卒)



平成6年3月末に定年退
官された有水 昇教授の後

任として、この度平成8年
8月1日付けで医学部放射
線医学講座を担当させて頂
くことになりました。大変
伝統があり日本でも有数の
放射線科を運営させて頂く
ことは、極めて名誉である
と共に、責任の重大さに

／身が引き締まる思いです。
私は慶應義塾大学医学部を昭和45年に卒業し、慶應義塾大学医学部産婦人科学教室に7年間在籍しました。その後婦人科腫瘍の放射線治療を担当するため、放射線科学教室に転出しました。放射線科治療に興味があり、放射線科医として過ごすことになりました。昭和56年から58年には慶應義塾大学の塾費留学生として米国テキサス大学アンダーソンガンセンターで、放射線治療と放射線生物学を学びました。帰国後は慶應義塾大学放射線科学教室で、留学中学んだことを継続して研究してきました。

放射線科の診療部門は大きく分けて放射線診断、放射線治療、核医学の三部門になります。近年放射線診断は横断画像診断(CT・MR)が導入され、診断法が著しく変化すると共に、血管内操作による手術が進歩し、インターベンショナル・ラジオロジーという分野が確立されてきました。核医学では当放射線科は寛教授、有水教授時代から日本では最高レベルを誇り、全国に先駆けてサイクロトロンとペトスキヤンが導入され、多くの優れた業績をあげてきました。核医学検査はさ

らにどんどん新しい薬剤が開発され、機能診断に貢献し発展しています。私は放射線治療を専門としてきましたが、放射線治療でも、正確な位置決めが可能となり、マルチリーフコリメータの使用や三次元立体照射が行われるようになり、進歩しています。今後は研究心に富んだ優

生化学第二講座
鈴木 信夫 (昭47卒)



8月16日付けで千葉大学医学部生化学第二講座の教授を拝命しました。これまでに、本挨拶文では記述不可能な程の数多くの先生方による御指導を受けてまいりましたが、そのたまものと考へ、深謝する次第です。私は、千葉大学医学部の発展に少しでも役立つならと考へ、本誌の編集に学生時代から携わらせていただきました。今回は、教育・研究面でのより一層の努力をする機会を与えていただいたと考へ、身の引き締まる思いです。

れた臨床医を育成し、関連病院の拡充を続けるという従来の教室の方針を堅持すると共に、最先端の技術を積極的に取り入れ、時代の要請に応えられる教室の発展に努力したいと思っております。皆様の暖かいご指導とご鞭撻を心よりお願い致します。

私は、医学生時代の大半を紛争にあけくれた世代でもあります。ノンポリでもなく、かといって先頭に立つこともできなかった一学生にとり、学問の府のあり方を勉強させられた一機会ではありました。各方面の現況をうかがい知りますと、理想の方向に向かうか否かは別として、講座制の廃止や全大学人への任期制導入などが人口に膾炙する時代がようやくやってきたという感があります。可能な限り現制度に縛られることのないようにし、教育と研究の自由な場を造り、意欲あふれる学生の手助けができれば幸甚と存じます。明治以来の輸入学問、欧米追随型科学の廃止と次世代以後を担う独自の学問

愛媛大学医学部臨床検査医学講座
牧野 英一 (昭42卒)



大系の創設をモットーに、人情のある独創者を一人でも多く輩出できる教室となるよう努力したいと考えま

平成8年9月1日付けで愛媛大学医学部臨床検査医学講座を担当することになりました。何故愛媛大学かと疑問に思われるかと思いますが、初代の竹内望教授は千葉大学第二内科の前々教授熊谷朗先生の阪大時代のお弟子さんであり、また当時の第二内科助教山本昌弘先生の兄弟子にもあたります。また斎藤康教授の徳島時代の恩師である奥田拓道先生が愛媛大学の医化学の教授であることから関係の諸先生方の御支援を頂きました。また愛媛大学は糖尿病の内科の専門医がおり、検査医学講座ではあります。糖尿病臨床をやりたいという要望もありお引受けした次第です。私は昭和42年卒で最後のインターン生であり、全く

す。今後とも、同窓の諸先生のご指導、お力添えを心からお願ひ申し上げる次第です。

の無給であったことからいわれるインターン闘争を経験しました。先輩諸氏の長年にわたる闘争のおかげでインターン制度に換わる研究医制度ができ給料がでるようになったのは周知のとおりです。インターン修了後、昭和43年に循環器をやるつもりで第二内科に入局しました。しかしながら当時吹き荒れていた大学紛争の嵐がとくに第二内科においてある事件をきっかけに燃えあがりました。結局これらの紛争は何事もなく收拾されるわけですがその功罪としてはこれまで絶対的であった医学部教授の権威が地に落ち、世間並みになったことにあります。昭和46年に熊谷先生が赴任され内分分泌代謝を専攻することとなり神経内分泌のテーマを与えられましたが、患者が少なかったこと、またそのころ発見された視床下部ホルモンであるソマトスタチンが腓ランゲルハンス島にもあることから糖尿病に転向し

ました。以来20数年間熊谷教授、吉田尚教授、齋藤教授のもとで金塚講師とともに糖尿病の研究、診療にあたり、患者会の設立(いのちは友の会)、認定施設の取得等千葉大学のみならず千葉県の糖尿病診療の中心としてやってきました。その間昭和52年から2年間インスリン作用の研究では世界の第一人者であるアメリカのバンダービルト大学生理学教室の河野哲郎教授のもとへ留学しサイエンスの神髄を体験したことはその後の研究活動に大変なプラスとなりました。帰国後インスリンレセプター・CDNAをクローニングした本学出身の現徳島大学嶋名教授との共同研究がきっかけで糖尿病の遺伝子異常の研究を開始しこの分野で世界をリードしたことは特筆するに値すると思ひます。

35年間在籍した千葉大学を去るにあたり若い先生方に言っておきたいことが2つあります。一つは研究活動を続けるためには千葉大学はローカルな大学であり学内、学外でのアカデミックポジションは少なく、そのためどうしても学外でのポジションを得る必要があります。是非がんばって研究業績をあげ全国的に展開

して欲しいと思います。二つ目は大学に残って研究をするからには経済を犠牲にしてやるわけですから大きな夢のある研究をやりたいと思ひます。私自身の夢はここ20年間やってきたインスリン作用の分子機構の解明にあります。残り十数年間この夢の実現に向けて全速力で走るつもりであります。

今回愛媛大学への転任にあたり第二内科糖尿病グループは金塚東講師が引き継ぎ齋藤教授のもとで新たな発展をはかるつもりでありますので会員の皆様方のご支援をよろしくお願い申し上げます。最後にこれまで長い間御支援頂いた先生方に感謝申し上げます。

新名簿(一九九七年版)
予約申込みご案内
発行予定

平成8年11月
価格 三千円

(送料を含む)
規格 B5版
(カラー8ページ)

未だ予約をされていない方は、同窓会事務局までご連絡下さい。振込用紙を送付致します。

るのほな随想

桑田次男(昭19卒)

千葉市は、戦後日本で最も変貌をとげた市の一つである。昭和十六年本学に入学した当時、るのほなの丘を散策して、私は次のような歌を作ったことがあった。

丘の上の麥畑道をたどりきてはつかに見ゆる海はま青に

麦秋の丘を越えて千葉中学のグラウンドの彼方横一線に青い海が眺められたものであった。現在はそのような牧歌的風景は失われてしまった。

大学の構内もそれに劣らず変貌した。入学後最初に学んだ基礎医学のキャンパスは一列に並んだ真中の樺の木とその両側の銀杏並木のあった広い道に沿って、一階建ての各教室がゆったりと並んでいた。卒業後私が勤務することになった細菌学教室は衛生学教室と連なった建物で、共通の入口の向かって左が細菌学教室、右が衛生学教室であった。

中枢神経系の解剖を教えて頂いた東大名譽教授の井

上通夫先生が、千葉は日本のゲッチングンであると言われたことを覚えている。

それは、首都から離れた小さな大学町と言った意味であったと思うが、結核菌の発見者であるロベルト・コッホも学んだゲッチングンそれは月沈原とも書かれたに千葉をなぞらえた井上先生その言葉が私に大いに氣に入ったものであった。

昭和三十三年の本学の卒業生であるゲッチングン大学医学部の高野光司教授を訪ねた折、微生物学教室のトムセン教授の依頼でインターフェロンの多面的作用についてセミナーを行ったことがあったが、そこには往時の千葉医科大学にあったような美事な樺の並木はなかった。しかし、本学のその並木も現在の附属病院が新築された時すべて移植あるいは切り倒されてしまったのは残念であった。

ある日の暮方、生理学と薬理学教室の連なっていた建物に入った所、暗い廊下の奥の方からバイオリンの音が流れて来て、一時はとした氣持に浸ったこともあった。

昭和十六年十二月八日の第一時限の授業は生化学で、故赤松茂先生の莊重な講義が予定されていた。講義に行くと、その日の朝ラジオの臨時ニュースで放送された日米英開戦の話が専ら交

されていった。従って、我々は戦時中に学生生活を送る羽目になり、その結果それから洋書や外国雑誌の輸入も全く途絶えることになってしまった。当時私の持っていたアッシュワツの病理学書は日本に輸入された最後の版であった。大体今日の人々にとって外国から一切の学術書、新刊雑誌の入ってこない様な状態は想像出来な

ないことと思われる。その時代の社会の成行きについては永井荷風の断腸亭日乗の第五卷(岩波)を読めばよく理解されよう。

所で、戦時中ではあったが当時の先生方の講義を大々享受し得たことは幸いと思っている。細菌学の講義は初め緒方規雄教授から受けた。休講が多く、数少ない先生の講義で印象に残っていることは、先生が戦前トロントの大学を訪ねた折の話である。構内の一室に世界の有名な医学者の写真が掲げられていたが、その中で日本の医学者としては北里柴三郎、志賀潔、秦佐八郎、

野口英世、および稲田龍吉の五氏の像があったのことに、従って日本の医学は細菌学者によって代表されていると言っても過言ではないであろうと言われた。緒方教授はそれからまもなく

辞任された。昭和十七年の四月に着任された病理学の滝沢延次郎先生の講義には強い感銘をうけた。先生は頭髪を短く刈り込まれ、終始厳肅な面持ちで熱っぽく大声で講義をされた。私は以来先生を深く尊敬し続けた。昭和四十二年先生は定年で退官され、それから僅か二年数ヶ月にして逝去されたことは誠に残念なことであった。

長身、白哲の鈴木重武先生には解剖学の講義と実習のご指導を受け、親しく暖かなお人柄に接することが出来た。先生は自然科学研究班という学生の部を指導され、学生が基礎医学の各研究室に参加して研究の実際に触れるよう各教室の主任教授に折衝して下さった。私は当時から細菌学に興味を持っていたので、昭和十六年の九月に着任された羽里彦左衛門教授のつ、が虫病リケッチアに関する動物実験をお手伝いするようになった。そして、寡黙な先生の寛容なお人柄に接して、

卒業後迷うことなく羽里先生の主宰された細菌学教室に入り、私の生涯を決定することとなった。

私の学生時代には法医学の加賀谷凡秋先生を中心に俳句会「やはぎ」と、生理学の鈴木正夫先生を中心とした「短歌会」があった。私は短歌会の一員であったが、クラスで親しかった伊藤弘完君から句会の話聞いた、中村草田男、金子兜太と言った俳人の名前を教えられたものであった。同君は現在埼玉で地域の医療に励んでおられる。その頃読んだ草田男の第一句集「長子」の中に次の一句があった。

昔日の春愁の場木々伸びて
今でも大学のキャンパスを通る時、この句を思い出すことが多い。
私は臨床の経験は全く持ち合せていないが、患者に接する医師は患者の心を知らねばならないと思っ

ていた。人間の心を知るには文学作品を読むのが最も良いとかねてから信じて来たが如何であろうか。私自身は当時から今日まで、鷗外、荷風、本太郎の全集などを愛読書として生き次いで来た。

千葉市は敗戦の年の六月に空襲を受け、大学も基礎医学の教室が壊滅的被害を受けた。その時私は軍医として相模原の陸軍電信隊に勤務していたので空襲の時の惨状を直接体験することがなかった。そして、部隊が八月末日解散となり、九月上旬には早くも復学することが出来たのは幸いであつた。

書館が如何に貧弱であつて、学生の向学心を刺戟する雰囲気欠けていたかを記したものであった。昭和四十六年手挾な旧図書館から現在の所に図書館は移転した。そして図書、雑誌の中央化も進み、近着の諸雑誌はいつでも手に取って見る事が出来るようになったことは喜ばしいことであつた。私はそれらの雑誌を読むことによって数々の夢をばぐくんだ。
図書館は現在、より近代的な新しい Library of Health Sciences として医学部本館の近くに完成間近かの姿を見せている。医学部の教育、研究の中心的施設として私もその完成を心待ちにしている。
(千葉大名譽教授)



牧野博安先生を追悼して

山 浦 晶 (昭40卒)



牧野博安先生は、昨年10月より体調をくずされ入院をくりかえしておられましたが、本学附属病院第二外科にて7月8日午後1時4分、70年の生涯を閉じられました。病名は肝細胞癌でした。

先生は大正15年1月1日東京に生まれ、昭和25年千葉医科大学を卒業後、母校の第二外科教室に入局され、早くも昭和28年12月には渡米され、シカゴ市アメリカンホスピタル、ボストン市レイヘイクリニック、カンサス州立大学といずれも名門の病院で脳神経外科の研鑽を積み、昭和35年7月、6年7ヵ月にわたる大きな成果をもって帰国されました。昭和38年4月に千葉大学医学部第二外科学講師、昭和40年10月同助教授に昇任されています。

昭和46年1月には脳神経外科学講座開設にともない初代教授に就任しました。平成3年停年により退職し、

千葉大学名誉教授の称号を受けています。

この間、第二外科在籍中に、外傷性脊髄損傷例に肋間神経と馬尾神経吻合を施行するという研究は、創意工夫を得意とする先生の面目躍如たるもので、時代を先取りした研究でした。その後の研究は脳神経外科学全般に及びますが、とりわけ重症頭部外傷の治療(大減圧開頭術)について幅広く指導されました。

一方、教育・行政面においては、千葉大学看護学部創設、千葉県救急医療センター設立、全国に先駆けた自動車事故対策センター附属千葉療養センター設立などに尽力され、また医学部附属看護学校長も勤められています。

学会においては、第2回日本神経外傷研究会、第9回日本小児神経外科学研究会、第43回日本脳神経外科学会総会の会長をつとめ、その他多くの学会の世話人として、日本の脳神経外科学の発展に大きな貢献をされました。

このように幾多のすぐれた医師、研究者を育成するとともに、日本の医療の推

進に多大な貢献をしてまいりました牧野博安先生の死はあまりにも早く、まことに残念なことであります。70歳をむかえいよいよさえた目で我々を御指導いた

稲垣義明先生を偲んで

増 田 善 昭 (昭35卒)



稲垣義明先生は平成8年6月25日、東京女子医大附属病院にて十二指腸癌のため69年の生涯を閉じられました。先生は昭和26年千葉医科大学を卒業後、千葉大学医学部内科学第二講座に入局され、田坂定孝、斎藤十六、熊谷朗教授の下で内科学とくに循環器学の研鑽を積み、昭和46年助教授に昇任、昭和49年新設された同大学内科学第三講座の初代教授として就任されました。以後、平成5年3月に御退官になるまで先生の優れた学識と温厚な人格をたたって大勢の教室員が入局し、現在では同門会員は三百名を越え、関連病院も県内外に30以上を持つ大教室に発展しています。

けると期待しておりました折の御病気でした。ここに慎んで御冥福を祈ります。

(脳神経外科学講座教授)

教室も先生の和を尊ぶお人柄を反映し、常に和やかな雰囲気を保ちながら最先端の研究にいそしんでおります。その研究は循環器学のすべてに及んでいます。とりわけ、画像診断、血行力学的分析については常に最新の技術を導入され、我が国のみならず世界の研究をリードして参りました。また、病院長の席にあっては国立大学では最初の冠動脈疾患治療部を作り、急増しつつある冠動脈疾患にたいし、内科、外科の枠を越えインターベンショナルな治療を取り入れたことは先生の卓見を示すものと存じます。千葉大学名誉教授となり、千葉労災病院長に就任されてからは大学に顔を向ける機会が少なくなり、私どもを支えてくれた感謝に耐えません。

先生は我が国の循環器学の重鎮として、第26回日本

脈管学会、第57回日本循環器学会など多くの学会を主宰されています。また、卒後教育にも熱意を持って当たり、特に、内科学会、循環器学会では認定医、専門医の基礎づくりを力を入れ、これらの制度を我が国に定着、普及させました。さて、先生は出身校の武蔵中学のモットーである

「自ら考え、自ら調べる」を座右の銘とし、教育、研究、診療に際しては常に陣頭に立って指揮をとって下さいました。また、学問に真摯であつただけでなく、趣味としての野球やゴルフにも真剣に取り組んでいました。医局対抗マッチでは大のファンであるタイガースのユニフォームを作り、肝心の場面に必ずピンチヒッターで登場しました。また、同門会のゴルフコンペには稲垣盃を設け、欠かさず参加していました。こんなとで私達も一緒になつて羽目を外しがちになったものです。今はなき先生の御温容を偲びつつ、御生前のあまたの功績に衷心より感謝と敬意を表し、御冥福を祈りましてお別れの言葉とさせていただきます。

(内科学第三講座教授)

おくやみ

- 紀 和夫 (大12)
竹内 丈夫 (大14)
金子 純雄 (昭15)
村尾 勉 (昭16・3)
榎方 早苗 (昭21)
小林 滋 (昭22)
中川眞五郎 (昭22)
広瀬 毅 (昭24)
牧野 博安 (昭25)
稲垣 義明 (昭26)
高相豊太郎 (昭28)
大島 一浩 (昭31)
澤口 義夫 (昭31)
須崎 均 (昭44)

会費納入のお願い

本年度会費未納の方に振込み用紙を同封しましたので、三千円を納入して下さい。なお行き違いに振込まれた方、会費免除の方(卒後50年経過の会員および名誉会員)、および銀行振込みの方に届いた場合はご容赦下さい。

正会員には甲と乙があり、従来乙会員(旧賛助会員)には会費を請求していませんでしたが、同じ目的をもつ会員として、同窓会活性化のために乙会員の皆様にも会費の納入をお願い致します。

人事異動

教授昇任

伊藤晴夫(昭39)泌尿器科学(帝京大市原病院教授より)

湯浅茂樹(岡山大学50)解剖学第二(岡崎国立共同研究機構助教授より)

矢野明彦(昭47)寄生虫学(長崎大教授より)

伊東久夫(慶大昭45)放射線医学(慶大助教授より)

鈴木信夫(昭47)生化学第二(同助教授より)

助教授昇任

旗持 淳(川崎医大昭53)皮膚科学(同講師より)

山田達夫(東京医歯大昭49)神経内科学(同講師より)

神津照雄(昭44)光学医療診療部(成東病院院長より)

講師昇任
土屋明弘(昭56)整形外科(同助手より)

吉本信也(昭和大昭53)形成外科(昭和大助手より)

宮武昌一郎(東大昭58)遺伝子情報(同助手より)

他大学
教授昇任
牧野英一(昭42)愛媛大学臨床検査医学(内科学第二助教授より)

堀 雄一(昭52)独協医大生理学第二(杏林大助教授より)

るの は な 同窓会賞

受賞者の言葉

東京大名教授

川村 明義 (昭20卒)



今回、級友加納六郎兄の推薦による私の「恙虫病の研究」が、第1回の「るの は な 同窓会賞」に因らずも選ばれたことは、身に余る光栄と感謝致します。昭和20年に本学を卒業し、復員後直ちに東大伝研(現医科研)に入所し、そこで定年まで研究を続け、母校には恩返しもしないだけに、恐縮の至りです。

受賞対象の恙虫病は、日本人の学者によって確認された数少ない感染症の一つで、戦前まではその研究は日本の独壇場でした。ところが戦場が本病淫漫地になるに及び、連合軍側では本病による被害が戦傷者より上回り、直ちに対策専門チームを組み研究、敗戦国日本を遥かに追い抜いてしまいました。戦後日本でも北日本海沿岸に限局するだけで

なく、本病が全国に存在することが我々によって確認され、本病研究が再スタートしました。私は若し生還できたなら、父を継いで本病の研究に一生を掛けるつもりでしたので、病原株の分離増殖、精製から始め、特に本病原体が株特異性が強く、

免疫がつかぬため再感染もしばしば起こることに着目、病原リケッチアの型別や生体内での増殖追跡のための免疫蛍光法、弱病原性リケッチアの分離法、確定診断法を確立しました。また、一時終熄しかけたように見え

た本病もこの20年間に急増し、この現象は韓国、中国にも及んでいます。この間、私は株特異性の解明のための型特異抗原の分析と、リケッチアの伝播経路の解析を目標に、細胞工学、遺伝子工学を導入、一気に諸外国の研究を抜き去ることができました。即ち、私は単に分子生物学的リケッチア学や媒介動物学を研究するのではなく、広くアジアに淫漫し、他の感染症の基盤として考慮されねばならない本病を近代医学として捉え、その対策を

確立する基盤を築いたのです。その間私は二重癌を乗り越え、本研究の集大成を昨年11月東大出版会より英文で上梓でき、国の内外より高い評価をいただいております。また、本研究は多くの共同研究者と共になされたことを申し添えます。

生体情報分野助手

幡野 雅彦 (昭57卒)



このたびは、るの は な 同窓会賞という名誉ある賞をいただき誠に有難うございました。私は千葉大学医学部を昭和57年に卒業し、小児科で4年間臨床研修を

しました。その後基礎研究に興味を持ち免疫研究部(現高次機能制御研究センター免疫機能分野)谷口教授の研究室で基礎研究を始めました。そのとき現在生体情報分野徳久教授(当時助手)と出会い免疫学、発生工学のほどきを受けました。徳久先生が神戸大学教授就任とともに一緒に神戸に行き新しい研究室のセッタップを一から見てきました。

その後アメリカ合衆国セントルイスのワシントン大学で約3年間ポスドクとして過ごしました。平成5年徳久教授の千葉大学生体情報分野転任にともない私も千葉大学に戻り、再び新しい研究室のセッタップをすることになりました。

ワシントン大学ではT細胞白血病からH O X 11という癌遺伝子のクローニングに成功し、幸運にも帰国後もH O X 11およびその関連遺伝子(N c x)に関する研究を続けることができました。現在主としてN c x ノックアウトマウスの解析を進めております。このマウスには巨大結腸症が発症し、ヒトの病気の関係について研究をすすめています。私自身はH O X 11遺伝子ファミリーと形態形成、細胞増殖、癌化との関係に興味を持ちトランスジェニックマウスおよびノックアウトマウスなど発生工学の手法を用いて機能解析を進めています。そのなかからこれらの因子の新しい機能さらにヒトの病気とのかわりなどがわかればと思っています。

医学部での基礎研究は研究者の自己満足で終わってはならず、最終的にはヒトの疾病の病因解明、診断、治療へと還元されなければならぬと思っています。今回の受賞を機に今後とも研究の発展のために今後とも御努力する決意しております。同窓の諸先生方の御指導、御鞭撻を宜しくお願い致します。

内科学第二研究生

武城 英明 (昭58卒)



このたび平成8年度るの は な 同窓会総会にて会長井出源四郎先生より同窓会賞を拝受させていただきました。このような身に余る受賞となりました研究を、入局以来長い間指導賜りました第二内科教授斎藤康先生はじめ諸先輩の先生方に心より御礼申し上げます。

私は、昭和58年第二内科入局後、吉田尚教授(現駒込病院院長)、斎藤康先生のもとで動脈硬化の臨床および研究をはじめめる機会を与えていただきました。当時、第二内科病棟には、動脈硬化の重大な危険因子の一つである高脂血症の中で最も重症な高コレステロー

ル血症を呈する遺伝性疾患、家族性高コレステロール血症の患者さんが数多く入院していらっしゃいました。白井厚治先生(現東邦大学助教授)にこの重篤な疾患成因とその治療法について研修医として一から教えていただいた後、多くの諸先輩の先生方にご指導を賜わり本疾患の遺伝的病因であるリポ蛋白受容体の研究を進めることができました。

現在明らかにされましたLDL受容体遺伝子ファミリー

リーは、高脂血症だけではなくアルツハイマー病をはじめとする神経疾患にも深く関与していることが推測されており、今後さらにこれらの研究を通じて、動脈硬化をはじめとする各疾患の臨床および研究にわずかも貢献できますよう一生懸命努力したいと願っております。どうぞ今後とも、同窓の諸先生方の尚一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

るの は な 同窓会賞候補者募集要項

第二回(一九九七年度)るの は な 同窓会賞の受賞候補者を左記により募集致します。

- 一、受賞対象者 本会員(甲および乙)のうち、医学研究あるいは医療活動の顕著な業績により、学術的あるいは社会的に高い貢献をした個人またはグループ。
- 二、表彰 三件以内、賞状ならびに副賞(総額百五十万円程度)を贈呈します。
- 三、応募方法 所定の申請用紙により、一九九七年一月六日から一月三十一日までに申請して下さい。
- 四、受賞者の決定 常任理事会の議を経て、一九九七年度の総会にて行われます。
- 五、問い合わせおよび申請用紙請求先 千葉大学医学部内 るの は な 同窓会事務局

るの は な 同窓会賞選考規定については第一〇号をご覧下さい。特に学外での教育研究診療機関に居られる方と、学内では学位取得直後の層からの応募を歓迎致します。

祝 表 彰

保健文化賞

将基面 誠 (昭37卒)

今後の四金会の開催予定

平成8年11月27日(水)
平成9年2月26日(水)
いずれも午後5時30分より
場所は後日発表します。

クラス会

五五会

(昭和30年卒)

一九九六年度の年例会は、5月25日(土)26日(日)、伊豆半島・修善寺温泉「新井旅館」で、催された。卒業生百三名のうち、物故18名、不詳1名で、84名は健在である。五五会は、首都圏と地方で交互に年例会を催している。近年の地方開催は

た天平風呂と、池庭や、横山大観ら大作家の絵の蒐集・展覧で有名だ。夕方、落語家・入船亭扇治さんの嘶をきいたあと、写真撮影、宴席で旧交を暖めた。酒はオール「越乃寒梅・特撰」。みやげは越乃寒梅と新潟・加島屋の鮭。翌日のゴルフは大仁CCで18名、観光はピッフェ美術館、沼津御用邸記念公園などで16名が参加した。

次年は、村瀬靖当番幹事長の世話で東京で催される。(望月良夫・記)

開業や勤務をゆったりと続ける級友が多く、大学教授たちはそろそろ定年で、本年度五五会には37名、夫人7名が参加した。修善寺きっての宿は、画家・安田靫彦が考証設計し



昭和十五年卒 クラス会開催の記

我々のクラス会(華葉会)は、去る6月15日(土)、新宿歌舞伎町車屋本店で開催した。

出席者8名、出席できた者はさすがに皆元気で、一名だけ79才、他は全部80才をすぎた。我々のクラスは80名、戦争を経験したので現存者25名は良い方。

実はこのクラス会、万年幹事だった一外の伊藤健次郎君と、二内の谷茂岡洋君が亡くなった後、8年程開催されなかった。昔年になつたので、このあたりでクラス会を再開しようという気運が起こり、東京在住の私と、海軍軍医学校同期の千葉県原市の鈴木元一君が幹事となり、昨年、新宿小田急別館「ハルク」で開催した。この時は出席者10名

あんなに元気だったと思われた連中が、入退院を繰り返していたり、又別の人は、JRの階段が上れないから出席できないとかで残念だった。今年は、昨年出席できなかった静岡市の小沢英夫君と、千葉県八日市場市の石井彪之助君が出席され活気づいたが、一方昨年出席し



た松戸市の高山直清君と、杉並の林修一君が所要で欠席されたのは残念だった。又昨年出席して元気だった千葉県香取郡山田町の岩立健齊君と、埼玉県深谷市の峰岸一雄君が共に病気で欠席された。

会場を歌舞伎町にしたのはどうかと思つたが、昔年をとつたので若返り法の一つと思つて、あえてここに

出席者、小張一峰君、田中洋君、石井彪之助君、篠崎幸一君、大橋常安君、小沢英夫君、鈴木元一君、助祐三郎の計8名。

特にこの夜、小張君は沖縄から参加した。彼は今も琉球大学名誉教授で、週一、二回沖縄に行っている由。昨年は中華料理で椅子席

だったので、今年は座勢でゆつくりしようと思いいここにしたので、リラックスした2時間、四方山話をして久闊を叙した。

来年は横浜の田中洋君が幹事となり、横浜でやることを決め、再会を約して散会した。

(写真)(前列右から)篠崎、鈴木、大橋、助、小沢(後列右から)石井、田中、小張の諸君

幹事 助祐三郎・記
平成8年7月1日

昭八会クラス会

私共のクラス「昭八会」(昭和8年入学、昭和12年卒業)の第30回クラス会は、平成8年6月16日(日)正午

から東京銀座三笠会館本店二階フランス料理「榛名」に於て開催した。

年々出席者が減るのはなかるうかと案じられたが、今回は、鈴木敏兄の御長女、羽根井祐子さんが「父の日」の親孝行で、附添として出席されたので、9名で昨年より1名多くて、幹事をホッとさせた。

本年度幹事、菅井規矩雄兄の開会の挨拶、故藤彰兄、大塚潔武兄、大槻頼雄兄、鈴木敏兄夫人、岡村正明兄夫人の御冥福を祈って1分間黙祷をし、植竹順兄の乾杯の音頭によって開宴、毎年のことながら、元

気でクラス会に出席出来る幸せをかみしめ、青春の日の思い出話に花が咲いた。

(写真)(前列左から)植竹順、鈴木敏、久富良次、稲生翼(後列左から)植竹護、菅井晴子、菅井規矩雄、小松源二、羽根井祐子 敬省略
(幹事 久富良次・記)

るの は な 同 窓 会

22 会

本年6月22日(土)我々恒例のクラス会(昭和22年卒)を帝国ホテルにて開催(隔年毎に地方と東京にて開きた)。

一年振りに同級生が一同に会し、心ゆくまで歓談した。しかし我々の年令になると、欠席者も多く、又1名2名と名簿から氏名が削られて行くのは淋しい限りである。

又本人独りでは心許ない



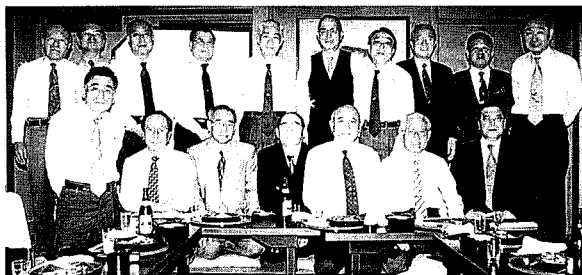
年令のため、夫妻同伴を原則としているので、御夫人方の参加者も多く、会終了後毎回用意してある別室にて、二次会を9時過ぎまで寮歌を歌ったりしてにぎやかに過ごし、又来年の再会を約して別れた。

来年は卒後50年に当たるので、何か趣向をこらさねばならないと、今から幹事

春秋会春の例会

(昭和31年卒
開業医グループ)

このところ、わがクラスでは、病院長、教授職にある者が、次々に停年を迎える年となっている。横浜市立大学医学部病理学教授蟹



は頭を痛めている次第である。

参加者次の通り(敬省略)
安藤、有益夫人、石郷岡夫妻、石橋(文)、石橋(祝)、浦野、加瀬、加藤夫人、笠川、一井、神山、神田、貫洞夫妻、清水、竹内、内藤夫妻、新田夫妻、信藤、平林夫妻、丸山夫妻、前田茂又、三橋、鷺田、若月夫妻以上32名であった。

以上 若月記

沢成好君が、この3月退官されたのを機に、かつて、わが会を横浜に案内して頂いたお礼として、蟹沢君をお招きして、風薫る平成8年5月11日、懐石割烹つきじ植むら本店にて慰労会を開催した。

冒頭、蟹沢君のご好意により、「肺がんの病理」について、彼のライフワークの一部を40分間講演して頂いた。会員一同、彼の永年の研鑽と、立派な業績に感心し、称讃した。その後、歓談を尽くし、午後9時散会した。

たいへん残念なことに、この会の2週間後当日最も元氣な長友大島一浩君が突如閉塞性黄疸にて入院し、7月31日他界した。洵に無常というべきである。心から冥福を祈る。

出席者・蟹沢成好、五味淑郎、川上秀一、徳山輝男、森

昭三一会

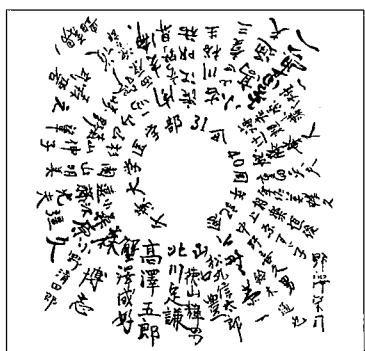
(昭和30年卒)

平成8年7月20日、明春本学教授を定年退官する山口、上原両教授を幹事役に、千葉市ホテル・サンガーデンで、卒後40周年のクラス会が行われた。明春全員が退官するわけで、また全員が65歳以上の年金受給者に、つまり高齢者の仲間入りをするようになる。

卒後40周年という区切りが、このように大きな意味



肇、宮川栄次、井幡宏、海老原雄一、小沢強、猪狩好令、西原源太郎、中野喜久男、山口慶三、神尾鋭、大島一浩、辻輝蔵、小野清四郎、計17名
(小野清四郎・記)



を持つことに、クラス会が近づくにつれ、諸兄も気が付かれたと思う。

クラス会では級友の計報や闘病の近況もあり、この稿を書いている時点で9名の友が逝ってしまった。

卒後40周年のクラス会に38名が会し、往時を偲んだ思ひは、これまでのクラス会にない重さがあった。80名中臨床教授6名(物故者3名)、基礎教授3名、国公立病院院長11名は、厚生省の局長に北川君がいたことの偶然と、必然かも。開業医は33名(物故者1名)。終始院長、定年はない。

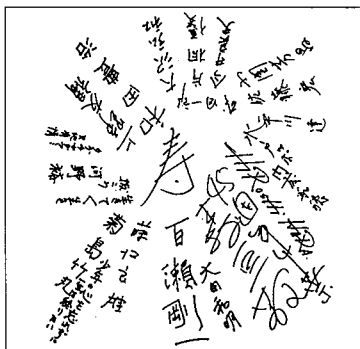
春秋会という会を小野常任幹事が運営。

ホテル・サンガーデンは元千葉銀行本店の跡地だそうだが、往時は駅前広場に置かれた街頭テレビに大勢の群衆が見入っていた。現在のJR東千葉駅が国鉄千

八千会

四十五周年

風薫る5月18日、昭和26年医専卒八千会総会、懇親



葉駅で、大学病院まで空襲の焼け跡地だらけだった。

翌朝ホテル・サンガーデンからの眺望は、あいにくと雲が垂れ込め、私たちに無縁の千葉ポート・タワーの上部も隠され、40年の途方もなく隔絶された歳月を思った。

出席者・上原すず子、宇佐美暢久、海老原雄一、遠藤光夫、小沢強、小高通夫、小野清四郎、夫人11名。

(上野恭一・記)

お互いの思い入れが一段と強いように思われる。

卒後以来、会を掌握している森巨敬会長、大田和明名幹事の手腕で毎年5月、東京、地元千葉、地方と定期的に開催されている。現在会員は70才前後に達し44名の会員の内、既に九名の友人を失った。

今回は、卒後45周年と言う事でクラス担任だった恩師百瀬剛一先生(現千葉労災名誉院長)をお招きし17名の参会者があった。

会が千葉市内ホテルサンガーデンの間で開かれた。

八千会なる名称は、第八回卒と破船に引掛けて付けられた実にユニークな名称である。わが会員は、終戦後の混乱期に海外引き揚げ廃校軍隊復員等で混成された集団で、恰も破れ船の如く流れ流され辿り着いた者の言である。その為か、

80才を、とうに越えられた百瀬先生のお元氣なことは我々以上であり、ざくばらんなお人柄も健在で誠に慶賀の至りであった。酒も入った宴たけなわに全員の近況報告がなされ、家庭の事、勤めの事、友人の事、病気の事、色々の話

が出たが、菊島竹丸君のよう
に、昨年、葛飾区の医師
会長に成られ張り切ってい
る者もあるが、大半は、既
に活躍の時期は過ぎ、余生
を模索する時期に入ってい
る様に思われた。

酒宴の終わる頃はすっか
り昔の顔に戻って和気あい
あい大いに盛り上がり、楽
しい時が流れた。

8時を回って、八千会の
名付け親、成田一郎君の三
本締で一応閉会となり、ほ
てった顔に夜風が心地好く
近くの二次会場レストラン・
パブに向かう、カラオケに
興じ、尽きぬ話しに再び花
が咲き旧交を暖めあい11時
近く来年横浜での再会を胸
に散っていった。

出席者 今井良夫、上野友
弥、大沢弘和、大田和明、片
桐 優、河野 裕、菊島竹丸、
小関芳昌、佐藤 宏、田口貞
文、内藤和穂、成田一郎、原
寛、平川 達、藤江良雄、
森 巨敬、和田豊治、以
上 17名 (大沢弘和・記)

「千葉大学医学部
八十五年誌」

「千葉大学医学部
百周年記念誌」

右の記念誌に残部があ
りますので、希望者には
贈呈いたします。詳しく
は事務局にお問い合わせ
下さい。

るの は な 会 静 岡 県 支 部 だ よ り

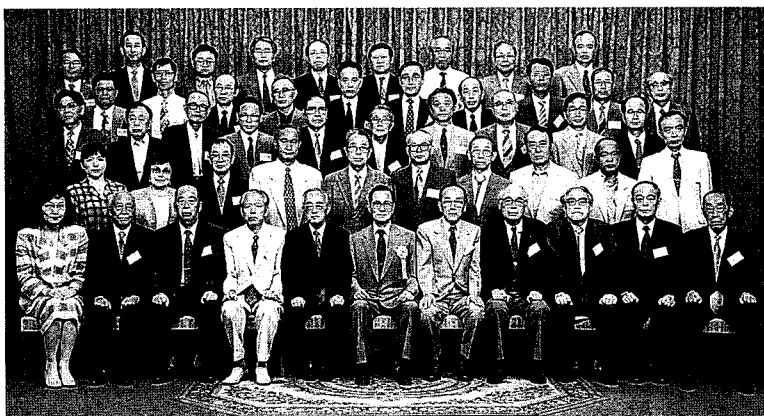
平成8年7月28日、恒例
のるの は な 会 静 岡 県 支 部 総
会が2年ぶりに、三島市三
島雅叙園ホテルで開かれた。
盛夏の折ながら、55名の出
席者を数え、極めて盛会で
あった。静岡県支部は2年
毎に東部、中部、西部の持
ち回りで総会を開催してい
るが、今年は東部が当番幹
事を務めた。

総会は支部会長 中村
武先生(昭20卒)の開会の
挨拶に始まり、望月 徹先
生(昭28卒)から庶務報告

が行われた。又最近逝去さ
れた方々、鈴木重一先生

(東大卒細菌学教室在籍)、
鈴木太郎先生(昭22卒)、
高相豊太郎先生(昭28卒)
に対し黙祷が捧げられた。
会計報告があつて、総会の
議事を終了した。

記念講演は東京大学第二
内科教授 小俣政男先生と
千葉大学第二外科教授 磯
野可一先生をお迎えして行
われた。小俣先生は「肝炎
から肝臓まで米国・千葉大・
東大での経験から」の演題



でB型肝炎、
C型肝炎、及
び肝臓治療の
現況そして肝
臓癌への展
望について熱
意溢れる講演
をされた。次
に磯野先生は
「卒後教育」
の重要性及び
今後の課題に
ついて、ご自
分の構想もま
じて多角的
に論じ解説さ
れ、次いで
「癌告知」に
ついて種々の
問題点を指摘
された。両先

生の記念講演は、会員外の
大勢の参加もあり、大変好
評であった。

記念撮影の後懇親会に移
り、支部副会長 斯波 隆
先生(昭30卒)(東部幹事
代表)の開会の挨拶の後、
本年4月静岡県医師会会長に
就任された勝呂 安先生
(昭20卒)が挨拶に立た
れ、今後の県医師会の活動
について色々と抱負を述べ
られた。次いで中村支部会
長から記念品が贈呈された。
静岡県医師会発足以来、本
学出身の県医師会会長は2人
目であるが、新医師会長の

手腕に大いに期待すると
もに、支部会員一同絶大な
協力を以て支持して行き
たい。続いて祝宴に移り、
久しぶりのるの は な 会 で 歓
談が絶えず、大いに盛り上
がった。宴たけなわのうち
に予定終宴時刻となり、支
部副会長 中島浩二先生
(昭21卒)から閉会の挨拶
があり、2年後の浜松での
再会を期し、名残りを惜し
みながら散会した。
(司会担当 昭29卒植松哲記)

本学医学生の数を読む

肺病研究施設

第一臨床研究部教授

山口 豊(昭31卒)

平成8年7月。昭三一会

最近では女子学生急増
が特に目につく。昭和25年
から29年の定員80名の頃は
7.5%。定員百名の昭和40年
から48年までは12%。定員
百20名の昭和49年から61年
までは11%。定員百名の昭
和62年から平成8年までは
27%と激増している。

さて、本題だが昭和27年
入学の我々は、それまでの
百名の定員が80名に減らさ
れた記念すべきクラスだと思
っていた。その頃戦時中
の急造軍医が巷に溢れ、医
者になっても食えないと入
学してから驚かされた。

今の教務は、学部学生、
大学院生、委託研究生など
業務が多く、やむなく自分
の教室の秘書や女性を動員
し、同窓会名簿から首っ引
きで調べることにしたが、
これが想像外の難作業で、
数合わせと理解に苦しみ、
まる3日間も要した。これ
にもとづくグラフは編集部
が作製したものである。

医専制度、医進課程二年
制度、医学教育六年制など
が苦勞させられた原因だが、
こうしてみると、国の都合
により医学生数は大変動
していることが理解できる。
最近の募集定員は、昭和
39年度までは80人、昭和40
48年度は百人、昭和49
61年度は百二十人、昭和62
年度以降は百人である。

猪之鼻奨学会への寄付

橘 正道(千葉大名教
授) 八十万円

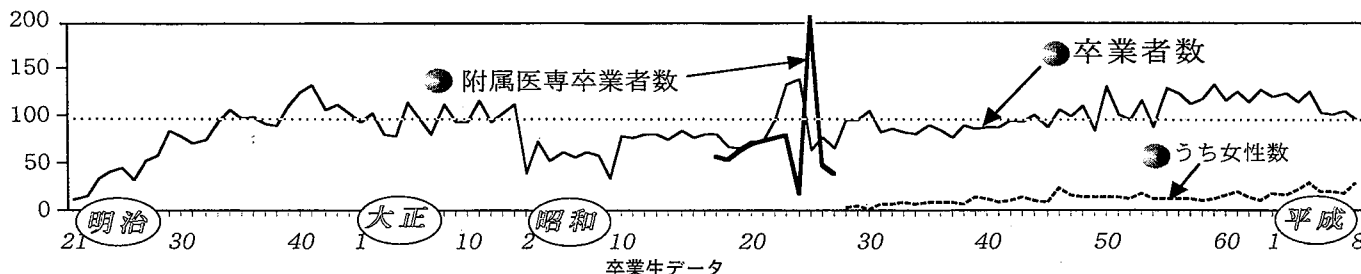
千葉大学薬学部

教授退官記念会 十万円

広瀬 聖雄(東大昭28卒・
千葉大名教授・薬学部)
五十万円

るの は な 同 窓 会 へ の 寄 付

島崎 淳(千葉大名教
授) 五十万円



「著書紹介」

千葉大学名誉教授
桑田次男 著

「杏林閑歩」について

―青春の季節の香り―
村山 智(昭26卒)

穏やかな午後であったので青葉の森公園の博物館の喫茶室に立ち寄り、まさにぼんやりコーヒーを飲んでいたら、桑田先生ご夫妻に声をかけられた。その折、近く随想集を出版されることをお聞きした。去る2月の建国記念日のことであった。やがて、まことに綺麗な字のお手紙を頂戴し、その著「杏林閑歩」について短文を書くように仰せつかった。私は昭和22年入学であるが、程なくして「千葉文学」創刊号を入手した。戦火のあと生々しく、様々に苦しむ医学生生活の場の亥鼻台に、青春そのものの文学活動があることを知って驚きもし、喜びもした。そこに掲載されていた「両頭の蛇」という木下太郎論の質の高さには感心したが、当時は桑田次男という人がどういう方なのかを存じあげなかった。この度本書に再録されたのを機会に読みなおしてみても半世紀前のより若き日の桑田先生の筆の運びの確かさに感心するばかりであった。

「ご自身が「あとがき」で本書の構成を説明されているが、前半は定年後に主に日本医事新報に書かれた随想を纏められたものであり、後半は先生のお好きな数人の作家への思いを書かれたものが中心であって興味深い。」永井荷風と腸チフスは「学鑑」(平成3年3月号)に掲載されたが、後に東京新聞のコラムに引用された。先生はこのことをご存知なかったようで、私が新聞のコピーを差し上げた時喜んで下さったのを感じ出す。「ミューズ」の館」

はリルケの手紙の訳であるが、これは先生がまだ旧制静岡高等学校の学生であった頃の労作で、恐らく本邦で最初の訳であろう。「薔薇のとげとリルケ」の中でもリルケの死因について触れておられるが、他の研究者、作家についてもその人生の終わりを知らうとする先生の姿勢が分かる。

昔から医学部図書館に掲げられてあった故菅田孝卿先生の肖像画が何を語るかについて「旧千葉医科大学図書館」の一文は是非若き研究者や医学生にも読んで貰いたいと思う。

本書は微生物学者としての先生の「青春の季節」が今も続いていることの証の

四十数篇から成っている。(一九九六年5月18日・丸善株式会社出版サービスセンター刊)

事業報告

木内理事より、昨年度の会議(常任理事会、総会、四金会)、支部るのはな会への大学教員の派遣、同窓会名簿の進捗状況、同窓会報の発行状況について説明があった。

議 題
一、規約改正(案) 増田理事より、千葉大学のはな同窓会会則の一部改正が提案され、承認された。

二、平成7年度決算(案) 佐藤理事より決算内容についての説明と新藤・笠川両理事より監査報告があり、決算案が承認された。医学部施設設備(記念講堂暗幕)助成と亥鼻分館への助成が含まれている。
三、平成8年度予算(案) 佐藤理事より、昨年度と

の相違点について説明があり、承認された。医学部施設設備助成、亥鼻分館助成のほか同窓会賞の授賞がある。

四、名誉会員の推薦 近藤理事より、昨年度末に退官された3教授(永野俊雄、橋正道、島崎淳)の名誉会員への推薦趣旨の説明があり、承認された。

五、のはな同窓会賞授賞者の決定 嶋田理事より、同賞の選考委員会による選考経過と候補者推薦理由の説明があり、川村明義(昭20、東大名誉教授、幡野雅彦(昭57、千大助手生体情報分野)、武城英明(昭58、千大研究生内科第二)の3氏への授賞が決定した。

報告事項
一、各地区のはな同窓会報告 埼玉支部(井上幸万氏)、長野支部(熊谷信夫氏)、静岡支部(期波隆氏)、千葉支部(越川 衛氏)の近況について報告があり、また本部への要望等も述べられた。要望については別途対処する事になった。

三、平成8年度予算(案) 佐藤理事より、昨年度と

会 計 報 告

自平成7年4月1日～平成8年3月31日現在

平成7年度決算報告書

収入の部		単位 円			
款	項	目	予 算 額	補正後予算	収 入 額
会	費	等	9,500,000		11,688,750
他	会 計	より 受 入	1,000,000		727,400
寄	付	金	2,400,000		2,588,300
雑	収	入	200,000		201,409
(当期収入計)			13,100,000	13,100,000	15,205,859
前	年 度	繰 越 資 金 受 入	6,759,003	6,759,003	6,759,003
収 入 合 計			19,859,003	19,859,003	21,964,862

支出の部		単位 円			
款	項	目	予 算 額	補 正 後	決 算 額
総	務	費	4,550,000	4,550,000	4,087,708
事	業	費	7,230,000	7,130,000	7,224,750
積	立	金	6,450,000	6,950,000	6,950,000
同	窓 会	基 金 等	6,300,000	6,800,000	6,800,000
退	職 手 当	引 当	150,000		150,000
予	備	費	1,629,003	1,229,003	1,229,003
支 出 合 計			19,859,003	19,859,003	21,964,862

平成8年度予算

収入の部		単位 円			
款	項	目	平成8年度	平成7年度決算額	対前年度決算増減額
会	費	等	12,000,000	11,688,750	311,250
他	会 計	より 受 入	700,000	727,400	△ 27,400
寄	付	金	1,710,000	2,588,300	△ 878,300
雑	収	入	264,000	201,409	62,591
(当期収入計)			14,674,000	15,205,859	△ 531,859
前	年 度	繰 越 資 金 受 入	3,702,404	6,759,003	△ 3,056,599
収 入 合 計			18,376,404	21,964,862	△ 3,588,458

支出の部		単位 円			
款	項	目	平成8年度	平成7年度決算額	対前年度決算増減額
総	務	費	4,685,000	4,087,708	597,292
事	業	費	9,640,000	7,224,750	2,415,250
積	立	金	1,850,000	6,950,000	△ 5,100,000
同	窓 会	基 金 等	1,700,000	6,800,000	△ 5,100,000
退	職 手 当	引 当	150,000	150,000	0
予	備	費	2,201,404	0	△ 2,201,404
支 出 合 計			18,376,404	21,964,862	△ 3,588,458

編集後記

昨年度末退官された解剖学第二、生化学第二、泌尿器科学、およびしばらく欠員であった寄生虫学と放射線医学の各講座の教授が決まり、医学部教授会はフルメンバー(現在の教授定数は50名)になりました。なお20年前の教授数は、39名40年前は26名でした。

最近、本会報には多くの原稿が集まり、情報量が増えて同窓諸氏から好評をいただいております。編集委員は多忙の中に時間を生み出し年三回(春秋冬)の発行を目標に努力しています。不備の点は多々あると思います。お気づきの点がありましたら、ご連絡下さい。

なおクラス会だより、各地区だよりなどの投稿にあたり、過去の会報のスタイルを参照して下さいと編集が楽になります(縦書き、一行12字、出席者の名前は姓と名の両方を書く、卒年は正確に)。(嶋田 裕)

